

どその頃、東大野口教授は2.4-Dの研究に着手、兵庫県農事試験場井上技師の2.4-D効果の発表があり、これらを総合し、除草剤に関して水も漏らさぬ研究組織が農林省研究部を中心にできあがり、着々効果をあげた。山梨県農事試験場由井技師のP.C.Pの効果確認に及んで、

水田除草は正に画期的となり、畑作、園芸、林業と拡がり、ついに研究事務を農林省から離して植物生育調節剤研究協会に委ねることとした。その「植調」が研究連絡のため機関紙を出すまでに生長した。慶賀に堪えぬとともに感慨を禁じ得ない。発展を祈念する。

発 刊 に 寄 せ て

このたび、日本植物調節剤研究協会が4才の誕生を迎えるにあたりまして、協会が発足当初から企図され、また関係者一同からも強く期待されていた機関誌「植調」が発刊されることになりましたことは、植調協会が生れるとき、いささか助産のお手伝いの労を果し得た者として、まことに慶賀にたえないところであり、心からお祝い申し上げます。

日本の農業があらゆる視野と角度から論議的となっている折から、生産資材としての農薬がいよいよ重要視されていることは申すまでもありませんが、特に“省力農業”達成のためには病害虫防除の合理的効果とともに除草、生育調整の実効発揮によって省力の目的が達せられなければなりません。

農薬工業会会長 深 見 利 一

2～3年来急速に再燃している米の増産運動が、本年はさらに拡大して展開されようとしております。“増産”と同時に“省力”と“品質向上”が大きな目標として打ち出され、全国的に各県それぞれの合言葉のもとに新しい米作り運動が繰り広げられており、“省力”に役立つ農薬の意義が一層高まっているのであります。

こうした背景にたって、本誌が除草剤・生育調節剤について行政的・技術的動向の指針として期待されるものはまことに大きいのであります。直接編集に携はれる各位のご努力は当然のことですが、関係各位の絶大な声援と協力によって、課せられた使命を充分に発揮し本誌が斯界の最高権威として内外から活用されるよう切望してお喜びの言葉といたします。

除 草 剤 の 今 後 の 方 向 (1)

農林省農事試験場 荒 井 正 雄

わが国農業発展の鍵

わが国の農業技術は、近年著しい進歩をとげつつあるが、特筆に価するものの一つに雑草防

除技術がある。この雑草防除技術の飛躍的な進歩は、戦後における雑草の生態的研究成果を基